

令和 5 年 6 月 30 日現在

機関番号：34105

研究種目：基盤研究(C) (一般)

研究期間：2019～2022

課題番号：19K00724

研究課題名(和文) 動機づけの自律的なコントロール能力の獲得過程

研究課題名(英文) The process of acquiring the ability to autonomously control motivation

研究代表者

山本 晃彦 (YAMAMOTO, AKIHIKO)

鈴鹿大学・国際地域学部・助教

研究者番号：60781804

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 2,400,000円

研究成果の概要(和文)：本研究は日本語学習者が自身の動機づけをどのようにコントロールしているのかを明らかにすることを目的とした。分析には学習者の「学習の記録」を用いた振り返り活動のコメント、自律的動機づけ質問紙調査、学習者および担当教師へのインタビューを用いた。調査の結果、動機づけの高い学習者は、自身の有能感を確認するとともに、弱点を分析し、具体的な課題を自身に与えていた。また、教師との交流(質問や意見交換)を活発に行うことによって、他者を自身の動機づけに有効活用していることがわかった。さらに、自律度の高さは自律的動機づけの向上・維持もさることながら、非自律的動機づけの抑制に負うことが大きいことがわかった。

研究成果の学術的意義や社会的意義

これまで学習者自身の内発的動機づけを高めることが、学習者の自律性を高めていくことと考えられてきた。しかし、本研究によって、学習者の自律性を高めていくためには非自律的動機づけを抑制することの重要性が明らかになった。自ら学習を選択した留学生が多いため、自律的動機づけが高い学習者が多いが、その発達段階はいくつかのタイプに分類される。各学習者が現在どのような自律的動機づけの段階にあるかがわかれば、教師がその学習者に対して、どのような働きかけを行えばよいかの目安にもなる。

研究成果の概要(英文)：The purpose of this study was to determine how learners of Japanese control their own motivation. For the analysis, comments on the learners' "Record of Study" reflection activity, the Autonomous Motivation Questionnaire, and interviews with learners and teachers were used.

The results showed that highly motivated learners confirmed their own sense of competence, analyzed their weaknesses, and gave themselves specific assignments. They also made effective use of others to motivate themselves, such as by actively interacting (asking questions and exchanging opinions) with teachers. Furthermore, the high degree of autonomy was found to be owed to the suppression of heteronomous motivation as well as to the enhancement and maintenance of autonomous motivation.

研究分野：日本語教育

キーワード：自律的動機づけ 学習の記録 留学生

1. 研究開始当初の背景

本研究は日本語学習者が自身の動機づけをどのようにコントロールしているのかを明らかにすることを目的とした。日本語教育領域で動機づけ研究が見られるようになったのは、80年代後半ごろからである。2000年代頃まではさほど多くは見られなかったものの、2000年代後半ごろから多くの研究者によって扱われるようになり、日本語教育領域においてひとつの研究分野として確立したように思われる。この動機づけ研究の隆盛からは、意欲を喪失した学習者がどうすれば再び意欲を獲得できるのか、高い意欲を維持していくにはどうすればいいのか、といった教師の苦悩が垣間見える。

動機づけ研究の根底には、「意欲の低下 = 悪、意欲の維持・向上 = 善」といった意識の存在や、「学習者の成績を上げるために、教師の力で内発的動機づけを高めよ」といったある種の使命感が存在すると思われる。したがって、その研究目的が「意欲の向上、維持、低下の抑止」となるのは必然であろう。しかし、その結果、調査環境に違いはあるものの、同一の視点による研究結果が量産されることとなり、日本語教育における動機づけ研究は膠着状態に陥っていたように思われる。この現状を打破するための新たな視点の必要性に迫られていたとも言えよう。

そこで、筆者は「自律的動機づけ」に注目した。内発的・外発的動機づけ理論は日本語教育領域において現在でも大きな位置を占めている。自己決定理論 (Ryan & Deci, 2002) によって、外発的動機づけの中にも自律度の低いものから高いものまで段階があることも知られている。現在の学校教育では内発的動機づけおよび、自律性の高い外発的動機づけを併合した「自律的動機づけ」(速水, 1998) の視点から考察された研究が発表されているが、日本語教育の領域では筆者の管見の限り、皆無に等しい。本研究では「自律的動機づけ」理論を用いた考察を日本語教育界に提示することも、ひとつの狙いとする。

2. 研究の目的

近年自律的学習が注目されており、自律性と動機づけは大きな関連があることは多くの研究で立証されている。これらの研究の多くは結果に注目して分析が行われているが、その仕組みについて言及されているものは少ない。本研究では学習者が自らを動機づける課程に注目する。自律的学習が動機づけに影響するのであれば、学習者は何らかの働きかけを自身に行っているはずである。学習者自身がどのように動機づけをコントロールしているかを分析し、それを類型化することによって、教師は学習者のタイプに適した助言を行うことができる。ひいてはクラスコントロールの円滑化へと繋がるであろう。具体的には以下の3つの点について明らかにする。

(1) 学習者はどのように自身に働きかけているか

学習歴の長い学習者はすでにある程度の内省力を身に付けており、動機づけをコントロールするために自身に何らかの働きかけを行っていることが予想される。具体的にどのような働きかけを行うことによって、動機づけを調整しているのかを明らかにする。

(2) 学習者はどのような自律的動機づけを持っているか

学習者がどの程度まで意識的に動機づけをコントロールしているのかを探るため、自律的動機づけ尺度の作成を試みる。この尺度をもとに、学習者のタイプを分類し、各群がどのような特徴を持っているのかを明らかにする。

(3) 教師にどのような関与ができるか

留学生の多くは日本語学習を自己決定しており、もともとの自律的動機づけも高いことが予想されるが、それでも、意欲の強度を常に一定に保つことは難しい。そこで必要となるのが教師からの支援である。教師はどのような働きかけを行っているのか、学習者はどのように教師からの働きかけを活用しているのかを明らかにする。

3. 研究の方法

主に、学習者が記録した「学習記録(授業記録と自己評価)」、自律的動機づけに関する質問紙調査、学習者及び担当教師へのインタビューから分析を進める。

(1) 学習者はどのように自身に働きかけているか

調査協力者は日本語教育機関で大学・大学院進学を目指す日本語上級クラスの学習者である。協力者らの所属するクラスでは授業の一環として「学習記録」を作成し、週に一度提出することが義務付けられている。この「学習記録」から、動機づけに関わると思われるコメントを抽出し、学習者らがどのように自らに働きかけているのかを明らかにする。

(2) 学習者はどのような自律的動機づけを持っているか

調査協力者は日本語教育機関で大学・大学院進学を目指す日本語上級者クラスの学習者、およ

び大学の学部留学生である。自律的動機づけに関する質問紙調査を行い、因子分析を行う。さらに、各下位尺度得点をもとに学習者らを類似の傾向を持った群に分類し、その特徴を探る。

自律的動機づけに関する質問紙は、当初、西村・河村・櫻井(2011)の自律的学習動機尺度20項目を留学生向けに一部改訂し、さらに日本語学習者に特徴的に現れるであろうと予想される4項目を追加した24項目を使用した。因子分析の結果から得た4つの下位尺度のうち、最も自律度の高い「内的調整(興味があるからやる)」と次に高い「同一化的調整(これをやっておくことが自分にとって大切だから目的遂行の手段としてやる)」を「自律的動機づけ」とし、「取り入れ調整(本当に大切だとは思っていないけれどもやらないとまずいからやる)」と最も自律度の低い「外的調整(やりたくないのにやらされている)」を非自律的動機づけとして分析を進めた。しかし、この質問紙調査の結果において、「自律的動機づけ」得点と「非自律的動機づけ」得点の双方において高得点という、当初計画した研究手法では分析しがたい現象が多々表れた。そこで、本当に自身の興味による動機づけである「内的調整」以外に、教師の働きかけによって学習に興味を持つという「他律内発的調整」の存在を仮定し、新たに速水(2019)の内発的動機づけ項目と他律内発的動機づけ項目から16項目をもとに質問紙を作成し、再検討を行った。

次に、質問紙調査の結果得られた下位尺度得点を用いて、RAI得点を算出した。RAIとは相対的自律性指数(Relative Autonomy Index)であり、動機づけの自己決定性の程度を表す指標として用いられる(Grolnick & Ryan, 1987; 岡田, 2005)。以下の式で算出される。

$$RAI = \text{内的調整} \times 2 + \text{同一化的調整} \times 1 + \text{取り入れ調整} \times (-1) + \text{外的調整} \times (-2)$$

この得点をもとにクラスタ分析を行い、5つの群に分類した後、各群の特徴について考察を進めた。

(3) 教師にどのような関与ができるか

調査協力者は日本語教育機関で大学・大学院進学を目指す日本語上級クラスの学習者、およびクラスを担当した教員である。「学習記録」は教師がコメントを付けて返却を行っている。学習者にはこの「学習記録」や教員からのコメントをどのように活用しているかについて半構造化インタビューを行う。また、教員には「学習記録」活動について何に留意しているか等、半構造化インタビューを行う。

4. 研究成果

(1) 学習者はどのように自身に働きかけているか

「学習記録」から、学習者のコメントについて動機づけに関わる箇所を抽出し分析を行ったところ、ポジティブな働きかけのみのタイプ、ネガティブな働きかけのみのタイプ、ポジティブ/ネガティブ併用タイプの3つのタイプに分類することができた。

コメントにはまず「自身に何ができるようになったか」という有能感に関する振り返りが出現しやすいことがわかった。ポジティブな働きかけのみの学習者はこの段階で止まっていることが多く、ただ「がんばります」といった具体性のないパフォーマンス的なコメントが目立った。

ポジティブ/ネガティブ併用型は自身の有能感を確認した後、「何が難しい、何ができない」といった自身の弱点に関する振り返りを行っていた。そしてさらに、「弱点を克服するため」の課題設定を自律的に行うようになり、「何の能力を上げるか」から「そのためにどのような練習を行うか」へと次第に具体化していった。また、教師との交流(質問や意見交換)を活発に行うことによって、他者を自身の動機づけに有効活用していることがわかった。

一方でネガティブな働きかけのみのタイプは「難しい、できない」といった弱点を述べるのみであり、「学習記録」活動そのものをかなり早い段階でやめてしまうケースが見られた。しかし、ネガティブな働きかけのみにもかかわらず、高い意欲を保っていた学習者も見られた。この学習者はコメント上で質問、訴え等教師への働きかけを積極的に行っていた。ここからも教師との関係性の構築が、動機づけに好影響を与えていることがわかる。

(2) 学習者はどのような自律的動機づけを持っているか

学習者らを自律度の高さを表すRAI得点をもとに5つの群に分類し、各群の特徴を探った。自律度の高い順に1~5群と称す。

第1群の特徴

「自律的動機づけ」得点が非常に高く、「非自律的動機づけ」得点が低いのが特徴。「他律内発的調整」得点は5群の中で最も低く、他の調整と有意な相関を持っていない。つまり、他者(教師)からの働きかけに影響されることなく、自律的に学習に励むことができる。

第2群の特徴

「自律的動機づけ」得点が高く、「非自律的動機づけ」得点が低いという第1群と共通する特徴を持っている。「他律内発的調整」得点が第1群に比べ高く、「内的調整」と中程度の有意な相

関を示している。「他律内発的調整」得点が高いほど、「内的調整」得点も高い傾向が見られることから、教師の働きかけ等、外からの働きかけを受容しており、内面化が円滑に進んでいると言える。これは他者からの働きかけがきっかけで、自身で学習に興味を持ち、自律度を高めているということを表す。

第3群の特徴

「自律的動機づけ」得点、「非自律的動機づけ」得点ともに非常に高いことが特徴である。「他律内発的調整」は「外的調整」と有意な相関を表しており、教師の働きかけによって、一時的、表面的に「学習を楽しんでいる」ことを表す。このタイプの場合、教師の工夫による授業への期待が大きく、それが内面化されていない。教師の働きかけをどのように内面化させていくかが課題となる。

第4群の特徴

「自律的動機づけ」の中でも「同一化的調整」得点が非常に高く、「非自律的動機づけ」得点も高いことが特徴である。「学習を楽しむ」というよりも、「目標達成の手段」としての動機づけが高いことを表す。「他律内発的調整」得点が高いほど「内的調整」得点が高くなることから、教師からの働きかけが学習への興味をはぐくむ一方で、「課題や社会的規則に関わる」得点と負の相関があることから、学習を楽しむことによって課題達成の意欲が削がれるという可能性も考えられる。

第5群の特徴

「自律的動機づけ」得点、「非自律的動機づけ」得点ともに低い群である。この群は「他律内発的調整」との相関も見られないため、教師の働きかけの影響を受けていないということになる。他群ほど質問紙の回答に一貫性がなく、自身の動機づけと向き合う力や内省力が不足している可能性がある。

(3) 教師にどのような関与ができるか

以上の結果を踏まえ、教師にどのような関与ができるかを検討した。

学習者の自身への働きかけを調査した結果、発達段階として、「有能感の獲得」⇒「課題の把握」⇒「課題の解決策の具体化」の流れが見えた。従って、教師は学習者に「自身に何ができるか、できるようになったか」について内省を促すことが第一歩であると思われる。第2段階として「自身の弱点のできるだけ具体的な把握」を促し、さらに第3段階としては「課題を克服する手段」についてのアドバイスを行っていく、といったように、段階を踏んだ関与が考えられる。

並行して行う必要があるのが、「学習者との関係性」を育てることであろう。ネガティブな働きかけのみを行っていた学習者も、教師とのやりとりを通して、動機づけを最後まで維持できていたということからも、「関係性」が動機づけを高める大きな要素であることがわかる。実際に学習者からは「学習記録」の活動の有用性に関しては肯定的、否定的な意見に分かれたが、教師のコメントに関しては肯定的な意見のみが表れた。教師のコメントを見ながら、励みとしたり、新たな学習方法を試したりするという意見が多数見られた。

また、自律的動機づけの高さによる各群の特徴から、全体的に「自律的動機づけ」得点が高い数値を示しており、それほど各群間に差異は見られないことがわかった。一方、「非自律的動機づけ」得点には大きな差異が見られたため、「非自律的動機づけ」得点をどのように抑制していくか、つまり、どのように教師が学習者の自己決定性を維持していくかを考慮した関与が必要とされることがわかった。あらかじめ学習者らがどの程度の自律的動機づけを持っているのかを教師が把握できれば、関与のスタイルへの参考となるだろう。

教師にインタビューを行った際、学習者へのコメントがどの程度役に立っているのか不安を抱いている様子が伺えた。さらに、どのような意識を持って関与していたのかについて尋ねたところ、大きく、「情意面」の支援と「方法面」の支援を行っていたことがわかった。「情意面」の支援では、学習者とのラ・ポール、信頼関係の構築を意識した言葉かけを行っていた。また「方法面」では学習相談、学習方法についてのアドバイスなどを行っていた。

学習記録やポートフォリオなどを用いた振り返り活動は多くの教育機関で行われているが、自律性の発達ははっきりと確認しづらいため、教師、学習者ともに不安に陥りがちである。本研究結果によって教師が学習者へどのように関与していけばよいのか、その一助となることを期待する。

< 参考文献 >

Grolnick W. S. , Ryan R. M. (1987) . : Autonomy in children's learning: An experimental and individual difference investigation , *Journal of Personality and Social Psychology* , 52 , 890-898.

- 速水敏彦 (2019) : 内発的動機づけと自律的動機づけ - 教育心理学の神話を問い直す , 金子書房 , 東京 , 1-279 .
- 西村多久磨 , 河村茂雄 , 櫻井茂男 (2011) : 自律的な学習動機づけとメタ認知的方略が学業成績を予測するプロセス - 内発的な学習動機づけは学業成績を予測することができるのか? - , 教育心理学研究 , 59 , 77-87 .
- 岡田涼 (2005) : 友人関係への動機づけ尺度の作成および妥当性 , 信頼性の検討 自己決定理論の枠組みからパーソナリティ研究 14 (1) , 101-112
- Ryan R.M. ,Deci E.L.(2002): Overview of self-determination theory:an organismic dialectical perspective. In E.L.Deci & R.M.Ryan (Eds.) , Handbook of self-determination theory , 3-33 , .Rochester TheUniversity of Rochester Press

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計5件（うち査読付論文 3件/うち国際共著 0件/うちオープンアクセス 5件）

1. 著者名 末吉 朋美、山本 晃彦	4. 巻 14
2. 論文標題 ケース・スタディでみる日本語学習者の自律的動機づけの変化	5. 発行年 2023年
3. 雑誌名 関西大学高等教育研究	6. 最初と最後の頁 45～56
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） 10.32286/00028089	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -
1. 著者名 山本 晃彦、音成 佐矢子	4. 巻 6
2. 論文標題 自律的動機づけに対する他律内発的動機づけの関与 留学生の日本語学習の場面から	5. 発行年 2023年
3. 雑誌名 鈴鹿大学・鈴鹿大学短期大学部紀要	6. 最初と最後の頁 151～164
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -
1. 著者名 山本 晃彦、末吉 朋美	4. 巻 28 (1)
2. 論文標題 「学習の記録」が自律的動機づけに与える影響	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 日本語教育方法研究会誌	6. 最初と最後の頁 106-107
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） 10.19022/jlem.28.1_106	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -
1. 著者名 山本 晃彦、音成 佐矢子	4. 巻 5
2. 論文標題 日本語学習場面における自律的動機づけの傾向：学部留学生を対象として	5. 発行年 2022年
3. 雑誌名 鈴鹿大学・鈴鹿大学短期大学部紀要	6. 最初と最後の頁 243-254
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -

1. 著者名 山本晃彦 末吉朋美	4. 巻 11
2. 論文標題 学習者は自身の動機づけにどのように働きかけているか	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 関西大学高等教育研究	6. 最初と最後の頁 31~42
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている (また、その予定である)	国際共著 -

〔学会発表〕 計4件 (うち招待講演 0件 / うち国際学会 0件)

1. 発表者名 末吉 朋美、山本 晃彦
2. 発表標題 学生の語りからみる自律的動機づけの 変化に関する一考察 K大学留学生センターの留学生を対象に
3. 学会等名 第27回 留学生教育学会 年次大会
4. 発表年 2022年

1. 発表者名 山本 晃彦、音成 佐矢子
2. 発表標題 留学生の自律的動機づけに他律内発的動機づけが与える影響
3. 学会等名 日本教育心理学会第64回総会
4. 発表年 2022年

1. 発表者名 山本 晃彦、末吉 朋美
2. 発表標題 日本語学習者のための自律的動機づけ尺度作成の試み
3. 学会等名 日本語教育学会 2021 年度第 5 回支部集会【関西支部】
4. 発表年 2022年

1. 発表者名 山本晃彦 末吉朋美
2. 発表標題 自律的動機づけと自己評価の関連
3. 学会等名 2020年度日本語教育学会春季大会
4. 発表年 2020年

〔図書〕 計0件

〔産業財産権〕

〔その他〕

-

6. 研究組織

	氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
研究分担者	末吉 朋美 (SUEYOSHI TOMOMI) (20761034)	関西大学・国際教育センター・留学生別科特任常勤講師 (34416)	

7. 科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕 計0件

8. 本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関
---------	---------